帝釈峡・雄橋（おんばし）

広島県・庄原市

日本・2002年発行

広島県の東北部、中国山地の中央部に国の名勝に指定された帝釈峡があります。この峡谷を日本最大の天然の石橋が渡っています。

庄原市の東城町と神石（じんせき）高原町の境界を流れる帝釈川の沿岸地域から岡山県の新見市にかけては、古生層の石灰岩体が作り出すカルスト地形が広がっています。

この地層は３億年前の石炭紀から２億年前の二畳紀にかけてサンゴや貝類が海底に堆積してできたと考えられています。炭酸カルシウムを多量に含む石灰岩は雨や流水に含まれる二酸化炭素に反応して次第に溶かされ、鍾乳洞や大きな陥没地を作り出しました。そのような浸食作用によって帝釈川沿いに大岩壁、滝、洞窟などの大自然の造形が生まれました。帝釈峡そのものは大規模な石灰岩洞の屋根が陥没してできたとする説が立てられています。そして水に溶けにくい部分が落ちずに残って、天然の岩の橋が生まれたとされています。

帝釈川を跨ぐ天然の橋は２つ見ることができます。帝釈天を本尊とする永明寺（えいみょう）は上帝釈の起点になっていますが、そこから遊歩道にしたがって２kmほど下流に行ったところに雄橋があります。雄橋の規模は谷を渡る長さが90m、幅は19m、高さは川底から天井までが18m、総高は40mもある雄大なもので、昭和62年（1987）には国の天然記念物に指定されました。

雄橋は昭和の初め頃までは未渡（みど）と宇山方面を結ぶ生活の道として使われており、文字通り人が渡る橋でした。橋の上には石仏も残されているようですが、現在では通る人はありません。さらに２kmほど下ったところに雌橋（めんばし）がありますが、ここはダム湖の一部になっていて、普通では見ることはできません。

帝釈峡や雄橋の奇観は古くから有名でした。江戸時代後期にこの地方の郡奉行を務めた広島藩の儒学者、頼杏坪（らいきょうへい）は、『帝釈廟碑』や『神橋詩』の中で、これらの景観を絶賛しています。また別の書物で雄橋のことを鬼橋や神橋という名前で詳しく紹介しており、古くは山の神が鬼に命じて一夜の内に架けたという伝承があったようです。

撮影：松村　博